



1. 非接触3次元カラー人体計測器  
2. 計測器での測定準備  
モデルは成人女子20代平均人  
[ (株)七彩製作 ]  
3. バーチャルボディ  
(モデルの3次元計測結果)



4. 測定結果から作成した自分のバーチャルモデルに、好きなタイプの服を着せられる  
5. 試作された服のひとつ

CLOSE-UP Interview

# 3次元注文システムを通じて心豊かな装いを楽しんで

教育学部教授  
増田 智恵

今まで少し遠かったオーダーメイドの世界を、ぐっと身近にしてくれるもの。

増田教授が取り組むのは、

そんなバーチャルな既製服注文システムの開発だ。

自分に似合う好きなデザインの服を自宅で手軽に注文する。

それは大量生産が行き詰まりを見せる中で、

必要なものだけを生産しようという環境への配慮であり

多くの人に開かれたファッションの未来であり、人間性の回復でもある。

ますだともえ  
学術博士  
専門分野は、被服構成学  
1954年生まれ

DNAと環境が決めた道

「この胸の刺繍、母がしてくれたのよ」  
開口一番、増田教授はよく通る明るい声で教えてくれた。  
「幼い頃から洋服はすべて母の手作り。成人式の振袖も母の仕立てでした」  
自身も、小学生のときには既に人形に型紙をあてて服を作っていたという。自分で好きな布地を選んでデザインして服を作る。どんなデザインの服にしようか、毎日考えてもあきなかった。

好きな服をバーチャルに試着

そして、今も自分の服はオーダーという教授が開発中なのが、消費者と既製服との新しい関わり方である「3次元ファッション・ファクトリ・プティックシステム」。それは自宅にいながら、“マイドレス”を作ろうという試みである。  
「非接触3次元カラー人体計測器」を使って身体のサイズを瞬時に測り、コンピュータでのシミュレーションで、着用イメージをつかむ。

将来、このシステムが実用化すれば、インターネット上でバーチャルに自分自身にいろいろな服を試着させ、服がオーダーできるようになるという。そうなれば普段は選ばないような色や素材、デザインの服も気軽に試着することができ、高齢者やからだの不自由な人のおしゃれの楽しみも広がるだろう。大量生産された既製服を買い、袖を通すか通さぬうちにタンスの肥やしにし、そして、また同じような服を買う。教授の研究は、こうした現代人の消費のムダに一石を投じる挑戦でもある。

立体的なボディを平面の型紙に

システム開発の出発点は、服作りの理論を大学で学んだ頃にさかのぼる。慣れ親しんできた服作りだったが、ダーツを入れる理由にあらためて納得し、被服構成学に興味を持った。  
「一人ひとり異なる立体的なボディをどこまで忠実に平面の型紙に反映できるか、ずっとトライしてきました。手で測ったり、ギブス

のような型を取って計算したりと試行錯誤を繰り返し、ようやく多くの研究者やメーカーの協力を得て、人体形状の3次元計測と型紙の自動作成ができるようになったのです」  
心の様子や生き方を示す服  
マイドレスの提案は、ファッション選択の利便性や将来性で注目されるが、教授の思いはそれだけではない。  
「人間だけがなぜ服を着るのでしょうか?服はただ暑さ寒さをしのぐためのものではありませんね。装いには心の中や生き方が表れます。それに人間って、生まれる前から母親の胎内で包まれている。包むこと、それ自体が愛情を示すものではないでしょうか」  
自分のファッションを考えることは、自分自身を自覚すること。自分の立場やTPOを踏まえ相手を持って装うからこそ、人とコミュニケーションがうまく取れる自分づくりにもつながる。服は心の健康や心豊かな社会生活をサポートする役割も担うもの、教授はそう考えている。

常に人間を原点として  
現在、教授は成人女性の人体形状の計測とデザインに関する評価をアンケートし、情報収集を進めている。自分にぴったりのサイズでお気に入りのデザインのマイドレスが選択できるよう、より多くの情報をシステムに組み込み、消費者にやさしいファッション注文システムの実用化を目指しているのだ。また、「非接触3次元人体計測器」は被服だけでなく、家具や建築設計など人間工学に関わる研究分野においてもさまざまな形で活用できる。そこで増田教授は、全国に数台しかないという手元の計測器を、若手研究者のほか異分野の研究者にも利用してもらおうと呼びかけている。  
「家政学というのは、服装・食物・住宅どの側面でも、人間を大事にするのが出発点です。私の研究が、健やかな暮らしづくりのお役に立てばうれしいですね」  
被服を通じて心の豊かさを追求する教授の挑戦は、これからも続く。